

一城山一

(小國 記)

1. 城山

ハイキングに行くときよく城山という名の山があります。私には城山というと私の青春時代に流れていた流行歌「流れる雲や城山に、登れば見える君の家、窓に明かりがともるまで、眺めていたっけ会いたくて……」が頭に浮かびます。城山はかつて城のあった山です。なぜ山の上に城はあったのでしょうか。

歴史のうんちくを述べます。平安時代になり唐の制度にならい律令制が執られ、公地公民制すなわち農地も農民も天皇のものになりました。しかしこの制度では人々にやる気がなくなり荒れた農地が拡大していきました。そこで開墾したものにはその土地を与える制度が取られた。源氏、平家、藤原などの有力者は東国などで開拓を行いました。

平安時代の末期から世の中は不安になり、山賊などが荘園を襲撃するようになりました。そこで荘園を管理している武士たちは、武装し農民を組織し、荘園を守りました。しかし武士同士の土地争いも起こり、武士は館の周りに堀をめぐらし、掘り起こした土砂で土手を作り、武士の館は砦のようになっていきました。

室町時代に入ると、南朝と室町幕府（北朝）と旧鎌倉幕府の残党と3つの権力争いになり、複雑化し世の中は乱れました。地方の武士たちは武士同士結束して武士団を作り、独立国の様相を呈した。室町幕府の継承問題などから戦乱になり、戦国時代になりました。武士たちはさらに堅牢な砦



を必要とした。そこで山に城を造りそこで居住するもの、山に砦を築き麓に御殿を作って生活するし、襲撃を受けると山の砦に立てこもって撃退するなどになりました。これらが山城です。

八王子城本丸跡

この頃平城、平山城、山城と実に多くの城が作られました。多くは領主の居館ではなく戦闘用の砦です。山城には山頂に平らな土地を作り本丸や櫓などを造った跡があり、自然の断崖絶壁を利用したり、なだらかであった傾斜面を掘り崩して断崖絶壁（切岸）を作り、薬研堀（V字型に掘削）を斜面に沿って造ったり、尾根上をところどころに薬研堀という空堀（水のない堀）で切断したりして、攻撃が困難になるようにしました。また本丸や櫓のある山頂とつながる傾斜のある尾根には、馬蹄形の平らな土地を階段状につなげて造り、尾根上に平らな土地をつくり、櫓跡や道を造りました。ここは要害地域として、戦闘のためのものを造ったのです。居館を山麓に設けるときには、なるべく谷奥深くに設置し、居館を囲むように尾根を要害地にして櫓をあちこちの山頂に設置しました。そのため城山は、さして高くない山であっても急峻で登りにくい山であり、かつ登れば見晴らしの良い場所である。

2. 山城の終焉

雨などにより自然に崖が崩れることがあり、崖を石垣にしているところもあったのですが、山城の多くは石垣を設置していないことが多い。これは鉄砲が出現する前に作られたためです。鉄砲が使われる前の戦闘は弓矢、槍、刀でしたが、殊に城攻めでは弓矢が大きな役割を果たしました。城を守る側は、高台に板でできた盾を並べて敵の矢を防ぎ、盾の合間から矢を射かけたり石を落としたりして反撃しました。この時高台や急な断崖絶壁は守るうえで大きな役割を果たしました。

しかし1543年に鉄砲が伝来。以降戦国時代の日本は弓矢に鉄砲がとってかわり急速に普及しました。殊に 1575年の長篠の戦は日本中を驚かせました。普段は農民で戦場では主に槍で戦う足軽が鉄砲を使って、日本一強い武田の騎馬武者を打ち破ったのです。鉄砲の弾丸は板でできた盾を打ち抜き、城の防御は盾では困難になり、厚い土塀で防御するようになりました。しかし土塀は重く切岸（作った崖）が崩落するようになったので崖を石垣で覆うようにしました。今までは崩れやすい崖、切岸の石垣化であったものが、すべての崖の石垣化が必要になった。石垣化は城山付近で石材を調達できる場所は造ることも可能であるが、なければ運び上げなければならず、工事は困難を極め山城の多くはこの時期に廃棄されました。また戦国の世でたくさんいた地方領主は豊臣秀吉などの権力者に統一されていき、武士同士の争いもなくなり山城は数を減らしました。さらに徳川の世になり、一国一城となり山城のほとんどは廃止されました。山城跡は本丸や櫓などの建造物は朽ち果て、石垣もないので山頂の平らな土地、薬研堀などしか残っていません。

3. 山城の例

津久井城跡（相模原市緑区）（築井古城）はその典型的なものです。登山道は急で、途中から山腹を回るような道になり尾根に出て、山頂へ至る。山腹を回る道は、山頂側から攻撃の対象になる。尾根道は空堀跡により分断されている。山頂には平らな場所があり、本丸跡、一段下がったところにも平らな場所があり、曲輪や櫓跡がある。櫓跡からの眺めは素晴らしい。眼下に津久井川とその平野が見渡せその先には高尾の連なる山々が見渡せます。



津久井城山（引用）

辛垣城跡（青梅市二俣尾）も典型的な山城である。JR 青梅線二俣尾駅から登り急峻な登山道を延々と上がって行きます。しかしここは、石灰岩の採掘がおこなわれ、山頂の平地も破壊されていてよくわかりません。樹木がうっそうと茂り見晴らしも悪い。

JR中央線の猿橋駅と大月駅の間の北側に壁のような巨岩が見えます。この岩は岩殿山ですが、ここにも岩殿城跡があります。南側は岩盤でほぼ垂直。北側は急峻な崖。東西に尾根が続きますが狭く両側が切り立っており通るのも危険なところです。意外にも岩殿山の山頂には平らな土地があり、ここに本丸や曲輪、烽火台（狼煙を見はったり、狼煙を上げる場所）などを設置したとのこと。ここも見晴らしは素晴らしい。眼下に桂川（相模川の上流）と平野、その奥には九鬼山高畑山山脈が見渡せる。

滝山城跡（東京都八王子市）は北側には多摩川が削った急な崖が高々とありますが、南側は山地川の平野につながっており、この落差はあまり大きくなく南側から見ると平山城の感じがします。ここにも山頂には本丸、曲輪を設けた平らな土地、空堀跡があります。

日本のマチュピチュと言われている兵庫県朝来（あさご）市にある竹田城跡は山城であるにもかかわらず石垣を作った。500年の歳月により、建築物は朽ち果てたが、石垣は残り今日の姿があります。ここは山が岩でできており石材は山を切り崩して調達しました。

八王子城跡が都内の山城としてあります。ここにも石垣があります。これ等の城は長篠の戦の後にも工事が行われています。山城を鉄砲による銃撃戦にも耐えられるように改築したものです。ただし石垣は、谷にある居住区域のみです。

ハイキングで八王子城跡を見てください。皇居などの江戸時代の後に造られた石垣とは異なり、野面積みという造りで、自然石をあまり加工せずに積み上げ、様々な大きさの石材が使われています。また山頂付近の砦などを置いたところには石垣はありません。（了）

今日に伝わる城は姫路城、皇居、大阪城、名古屋城などは最初に造ったのは古いのですが、現在に続くものは江戸時代に作り直されたものです。

山城から石垣の城への変化

今回は石垣についてうんちくを述べたいと思います。

戦国時代は小さな国々が相争い、山城はその時の戦闘用のものです。山頂に平地を作り、そこに本丸を置き、その山頂につながる尾根に平地を作り、曲輪を作った。山腹は自然の急な崖を利用したり、なだらかな斜面は切り崩して、急傾斜の崖である切岸を作った。天守閣は織田信長が、安土城で作ったのがはじめです。以降日本は統一へと強力な大名による戦いへと変わりました。天守閣は敵対勢力への威嚇や住人への権威付けで作られました。前回にお伝えしたように、鉄砲の出現は、戦闘体制を大きく変えました。それまで飛び道具は弓矢でしたが、これは板でできた盾で十分防ぐことができました。しかし鉄砲はこの盾を打ち抜きます。盾は戦いに役立たなくなった。城の守りとして厚い土塀を作り、鉄砲の弾丸を防ぐ必要に迫られました。しかしこれは重く崖は崩れてします。この土塀を支えるのに石垣が必要になりました。それまでも緩やかな斜面を切り崩して作った切岸などは崩れやすく、石垣を作って崩れを防いでいました。しかし鉄砲出現後石垣は努力目標から必要条件に変わりました。

山中を歩いていると、時々木々の中の苔むした石垣に出会いますが、これは廃村跡が多い。これ等の石垣は皇居や国宝級の城に見られるような大きな石材ではなく、人が運べるような大きが多く、小ぶりでまた不揃いな石で作られ、石垣表面は石が出っ張り凸凹がある。これ等の石垣を野面（のずら）積みと言います。八王子城を見たことがありますか？城山川の北側に石垣を作って平地を作り、ここに御殿を作り、居住場所とした。城山川の下流側から御殿に近づこうとすると大きな野面積石垣に当たります。石垣は御殿跡の周りのあたりのみです。城はこの谷を挟む2本の北側と南側の山脈にありますが、こちらには石垣はありません。城のある山はどこも急峻で工事は困難であったであろうと思われます。



石垣の積み方には野面積みのほかに打込接（うちこみはぎ）、切込接（きりこみはぎ）、算木積があります。野面積みは石を加工せず積み上げるのに対し、他の三つの方法は石を加工し、表面、上下左右の面を削り（加工）して積みます。打込接の石垣では大きな石を積み上げ、大きな石と石の隙間を埋める小さな石で構成されています。表面はほぼ平ですが穴がいたるところにあります。切込接は石をさらに加工し隙間はほぼなく、表面は平です。そのため城を攻撃するものは登って行くのは困難です。排水ができないためにわざわざ排水口を作ります。算木積は城の石垣の角にみられます。石を長方形に加工したものを長辺と短辺を交互に積んだものです。山のはなしとは異なりましたが、石垣を見つけたら思い出してください。

<Wikipedia の説明>

野面積み（のづらづみ）

自然石をそのまま積み上げる方法である。加工せずに積み上げただけなので石の形に統一性がなく、石同士がかみ合っていない。そのため隙間や出っ張りができ、敵に登られやすいという欠点があったが排水性に優れており頑丈である。技術的に初期の石積法で、鎌倉時代末期に現れ、本格的に用いられたのは16世紀の戦国時代のことである。野面積みの一種として穴太積み（あのうづみ）があげられるが、穴太積みは穴太衆が手掛けた石垣であって、特に野面積みの一種をいうものではない。穴太衆の技術の高さを誇示する為に江戸後期以降用いられた呼称である。

打込み接ぎ（うちこみはぎ）



表面に出る石の角や面をたたき、平たくし石同士の接合面に隙間を減らして積み上げる方法である。関ヶ原の戦い以後、この手法が盛んに用いられた。野面積みより高く、急な勾配が可能になる。

切込み接ぎ（きりこみはぎ）



方形に整形した石材を密着させ、積み上げる方法である。慶長5年（1600年）以降、隅石の加工から徐々に平石にまでわたるようになり、江戸時代初期（元和期）以降に多用されるようになった[1]。石材同士が密着しているため排水できないため排水口が設けられる。

積み方による分類石

垣の積み方は、布積と乱積の2つに大きく分けられる。石垣最上部の天端（てんば）が垂直になった箇所を雨落とし（あめおとし）といい、その下に反りがあるものを「寺勾配」、雨落としが浅い・無いものを「宮勾配・扇の勾配」という。

布積み（ぬのづみ）

方形に整形した比較的大きな石を目が横に通るように積み上げる方法で、整層積み（せいそうづみ）[2]ともいう。目地が通っているため、強度に問題がある。現在でも擁壁事業（土留工事）で用いられているが、現在はコンクリート擁壁の表面にモルタルを接着剤とした練り積みであり、強度的問題は無い。

乱積み（らんづみ）

大きさの違う自然石の平石、加工した平石をさまざまな方向に組み合わせ、積み上げる方法で、乱層積み（らんそうづみ）ともいう。安土桃山時代以降に用いられた。また布積の発展型とされる、「整層乱積み（せいそうらんづみ）」もある。大きさの違う長方形の石を使い、横目を通さないため布積より崩れにくい。

巻石垣

石垣が孕んで（脹らんで）崩落する事を防止するために既存の石垣の前面に築いて補強する石垣。現存する城跡もあるが中でも鳥取城天球丸の巻石垣は球面になっており現時点で確認されている唯一の球面石垣である。

外観による分類

算木積み（さんぎづみ）

石垣の出角部分（隅石）の積み方である。慶長10年（1605年）前後に用いられて以降、城郭の石垣に見られる。長方体の石の長辺と短辺を交互に重ね合わせることで強度を増している。

谷積み（たにづみ）

平石の隅を立てて積む積み方で、落積み（おとしづみ）ともいう。長方形の平石を用いる例もある。1800年代中期以降に見られ、城石垣ではその多くは近代の造営であるという。またこの積み方は昭和年間に至るまで道路工事で使われ、現在でも多く見ることができる。

亀甲積み（きっこうづみ）

石材を六角形に加工して積み上げる切込み接ぎの石垣の一種である。亀の甲羅の模様に見えるためこう呼ばれる。力が均等に分散するため、崩れにくい。江戸後期に低い石垣に用いられた例のみである。沖縄のグスクでは、相方積みともいわれる。

玉石積み（たまいしづみ）

玉石を用いた積み方。頑丈でないため石垣を高くすることはできない。

笑い積み（わらいづみ）

大石の周りに比較的小さな石を積む積み方。